

<ニューノーマル時代の新用語>

■ インフォデミック

インフォメーションとエピデミック（流行）を合わせた造語。主にインターネットで正確ではない情報が広がり、現実社会に影響を及ぼすこと。

■ エッセンシャルワーカー

生活や社会活動になくてはならない電気、交通、通信、医療といったインフラに関わる仕事をする人々を指す。感染リスクがある中でライフラインを支える労働者に「感謝しよう」という動きがインターネットを中心にひろがった。直訳は「必要不可欠な労働者」。

■ オフピーク出勤

電車が最も混む時間帯を避けて出勤すること。ウィルス感染予防になるほか、満員電車に乗らないことで出勤へのモチベーションが向上する人も。出勤時間を遅らせる場合は朝の時間にゆとりが生まれるメリット効果も。

■ オーバーシュート

「超過する」「度を越える」という意味。もともとは金融市場や統計、証券などで使われる。現在では「ウィルス感染者が爆発的に増加している」状態を指すケースが増加。

日本で生活をしている外国人からは意味が分からないという声も上がっているようです。

■ オンライン飲み会

ビデオ通話サービスを利用した飲み会。席数を気にせず大人数で同時通話できたり、オリジナル背景で笑いを取ったりとオンラインならではの魅力が多く普及。今では従来の飲み会のことを「リアル飲み会」と呼ぶようです。

■ サードプレイス

自宅や職場ではない「第三の場所」のこと。仕事との関係性に捉われず公園やカフェなど幅広い場所を指す言葉だったが、現在はコワーキングスペースなど「仕事をするための場所」として使われることが多い。

■ シェアオフィス

正確にはシェアードオフィスという。複数の企業や個人が共有するオフィスのこと。パソコンひとつで仕事ができるクリエイターなどの利用を中心に広がり普及。オフィスの分散を図れる、新しい人脈を広げられるなどのメリットがある。

■ ジョブ型人事制度

入社時から担当する職務や報酬などを明確に定めて雇用する制度。海外では主流だが、同一労働同一賃金の導入が進み、リモートワークも広がる今、国内の企業でも採用するケースが増加している。

■ 巣ごもり消費

外出自粛期間に生まれた新しい消費需要。Eコマース（電子商取引）を利用した自宅でのショッピングや、動画配信サービスで映画などを楽しむ人が増加している。

■ ソーシャルディスタンス

ウイルス感染者拡大を防止するための手段。社会において人と一定の距離を空ける、グループで集まらないようにするなど方法は様々。日本語では社会距離拡大戦略と言い、正確にはソーシャルディスタンスングとなるが区別なく使われている。

■ デジタルトランスフォーメーション（DX）

「ITの浸透が人々の生活をより良くする」という概念のこと。例えばAI（人工知能）やIOT（モノのインターネット化）の普及により、私たちの消費行動や企業活動などのあらゆる面で快適になっていることこそが「DXの浸透」だと言える。

■ テレカン

テレフォンカンファレンスの略。ビデオ通話サービスを利用して会議を行うこと。移動にかかる時間やコストが省けるなどのメリットがあり、自粛期間中に急速に利用が増えた。これをきっかけに会議の必要性を見直す企業も多い。

■ 2地域居住

都会と地方に2つの生活拠点をもち、週末や数か月など様々な頻度で行き来する新しい生活様式。インターネット環境が整備されてどこでも仕事ができるようになったいま、注目を集めている。

■ ポストコロナ

コロナ禍が収束した後の世界を指す。アフターコロナやビヨンドコロナなどとの違いは明確になっていないが同じ意味として使われるケースが多い。ビフォーコロナは流行前、ウィズコロナはコロナ流行中の生活や社会活動を主に指して使われる。

■ ローテーション勤務

オフィスに密な状況を生まないように、社員の出勤率を減らす勤務体系。社員をグループ分けし、出勤する時間帯をずらしたり、テレワークを組み合わせることで出勤する曜日をずらしたりと企業によって方法は様々。

■ ワークেশョン

2000年代に米国で生まれた「ワーク」と「バケーション」を組み合わせた言葉。リゾート地などで休暇をしながら遠隔で働くこと。リモートワークなどと同じように労働体系の一種であり、多くの場合出勤として扱われる。

引用元：日経新聞掲載「ニューノーマル時代の新用語集」より